

海軍  
令  
第六十七號

達第六十七號

魚形水雷調整場規則左ノ通定ム

大正二年四月一日

海軍大臣 男爵 齋藤 實

魚形水雷調整場規則

第一條 各軍港ニ魚形水雷調整場ヲ置ク

第二條 魚形水雷調整場ハ防備隊ノ所屬トシ當該鎮守府所管艦艇ノ使用ニ供シ又出來得ル限リ他所管艦艇ノ請求ニ應シ之ヲ使用セシムルモノトス

第三條 防備隊司令ハ部下職員ヲ指定シテ水雷調整場ノ管理ニ任セシメ必要ニ際シ使用ニ差支ナカラシムヘシ

第四條 鎮守府司令長官必要ト認ムルトキハ魚形水雷調整場使用ニ關スル細則ヲ定ムルコトヲ得

百  
海軍

1599

廢止

大正四十年達第七十四號ハ之ヲ廢止ス

達第六十八號

艦隊職員勤務令中左ノ通改正ス

大正二年四月一日

海軍大臣 男爵 齋藤 實

第三十一條 司令官ノ參謀ハ司令官ノ命ヲ承ケ服務シ其ノ命令ノ傳達ヲ掌リ並之カ實施ヲ監視シ副官ヲ置カサル艦隊ノ參謀ハ仍人事、文書ノ取扱其ノ他機密事務ヲ掌理シ官印ヲ監守スヘシ

達第六十九號

水兵、木工、機關兵、看護及主厨ノ帽徽章ニ記スル名稱ヲ左ノ通定ム

大正二年四月一日

海軍大臣 男爵 齋藤 實

軍艦、海兵團、要港部、驅逐隊、艇隊、潜水艇隊、防備隊、港務部、病院看護官及諸學校ニ在ル者ノ帽徽章ハ其ノ定員又ハ補缺員タルト練習生タルト問ハス當該艦團部隊院校等



百一

海軍

ノ名稱ヲ附シタルモノヲ用ウヘシ

諸官廳、運送船、工作船、戰時特設船舶部隊及未成艦艇ニ在ル者ノ帽徽章ハ其ノ在籍鎮守府所屬海兵團ノ名稱ヲ附シタルモノヲ用ウヘシ

驅逐隊ヲ編制セサル驅逐艦ニ在ル者ノ帽徽章ハ其ノ驅逐艦ノ名稱ヲ附シタルモノヲ用ウヘシ

附則

新ニ設置セラレタル防備隊ニ在ル者ノ帽徽章ハ營分ノ内元所屬水雷團又ハ敷設隊ノ名稱ヲ附シタルモノヲ用ウルコトヲ得

明治四十年達第七十四號ハ之ヲ廢止ス

清

達第七十號

卒業證書及修業證書書式別紙ノ通定ム

大正二年四月一日

海軍大臣 男 齋藤 實



百一  
海  
軍

1601

(第一號書式)

第 號

卒業證書

官 氏 名

海軍大學校甲種(乙種)(機關)學生  
 教程卒業ヲ證ス

年 月 日

海軍大學校長 官位勳功爵 氏 名

印

(第二號書式)

第 號

修業證書

官 氏 名

海軍大學校專修學生航海術(船用機關  
 計畫科)(軍用電氣工學科)教程修業ヲ  
 證ス

年 月 日

海軍大學校長 官位勳功爵 氏 名

印

(第三號書式)

第 號

卒業證書

海軍兵學校(海軍機關學校)生徒  
 氏 名

海軍兵學校(海軍機關學校)教程卒業  
 ヲ證ス

年 月 日

海軍兵學校長 官位勳功爵 氏 名

印

(第四號書式)

第 號

修業證書

官 氏 名

海軍砲術學校高等科(普通科)(特修科)  
 學生教程修業ヲ證ス

年 月 日

海軍砲術學校長 官位勳功爵 氏 名

印

(第五號書式)

第 號
修業證書
官 氏 名
海軍水雷學校高等科(普通科) 學生教程修業ヲ證ス
年 月 日
海軍水雷學校長官位勳功爵氏名
印職

(第六號書式)

第 號
修業證書
官 氏 名
海軍水雷學校特修科學生水雷術(電信 術教程修業ヲ證ス
年 月 日
海軍水雷學校長官位勳功爵氏名
印職

(第七號書式)

第 號
修業證書
官 氏 名
運用術學生教程修業ヲ證 ス
年 月 日
運用術練習艦長官位勳功爵氏名
印職

(第八號書式)

第 號
修業證書
官 氏 名
海軍工機學校普通科(特修科)學生教程 修業ヲ證ス
年 月 日
海軍工機學校長官位勳功爵氏名
印職

1603

國立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

<http://www.jacar.go.jp>

(第九號書式)

第 號

卒業證書

官 氏 名

海軍軍醫學校甲種(乙種)學生教程卒業  
ヲ證書

年 月 日

海軍軍醫學校長官位勳功爵氏名

印鑑

(第十一號書式)

第 號

修業證書

官 氏 名

海軍經理學校甲種學生(乙種學生)(丙  
種學生)教程修業ヲ證書

年 月 日

海軍經理學校長官位勳功爵氏名

印鑑

(第十一號書式) 注意 添付員トシテ官階アル者ハ其官  
階頭書ス(シ)

第 號

修業證書

海軍豫備生徒(海軍豫備  
員)(海軍豫備員志願者) 氏 名

海軍砲術學校(海軍水雷學校)(海軍工  
機學校)ニ於テ砲術(水雷術)(機關術)  
ヲ修業シタルコトヲ證書

年 月 日

(海軍砲術學校  
海軍水雷學校  
海軍工機學校)長官位勳功爵氏名

印鑑

1604

國立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

http://www.jacar.go.jp



大正十二年達  
第三百三十五號  
則ニ依リ本令廢止

達第七十一號

左ニ掲クル特修兵ニシテ卒業ノ月ノ初ヨリ起算シ左記期間内ニ現役滿期トナルヘキ者ハ  
其ノ期間ノ滿了ノ日迄引續キ服役ノ義務ヲ有ス

大正二年四月一日

海軍大臣 齋藤 實

- 一 特修科砲術練習生教程ヲ卒業シタル者 二箇年
- 二 高等科砲術練習生教程ヲ卒業シタル者 三箇年
- 三 普通科砲術練習生教程ヲ卒業シタル者 四箇年
- 四 特修科水雷術練習生教程ヲ卒業シタル者 二箇年
- 五 高等科水雷術練習生教程ヲ卒業シタル者 三箇年
- 六 普通科水雷術練習生教程ヲ卒業シタル者 四箇年
- 七 運用術練習生教程ヲ卒業シタル者 三箇年
- 八 高等科信號術練習生教程ヲ卒業シタル者 三箇年

百三 海軍

- 九 高等科電信術練習生教程ヲ卒業シタル者 三箇年
  - 十 特修科軍樂練習生教程ヲ卒業シタル者 三箇年
  - 十一 專科軍樂練習生教程ヲ卒業シタル者 四箇年
  - 十二 艦匠術練習生教程ヲ卒業シタル者 四箇年
  - 十三 高等科機關術練習生教程ヲ卒業シタル者 三箇年
  - 十四 普通科機關術練習生教程ヲ卒業シタル者 四箇年
  - 十五 高等科電機術練習生教程ヲ卒業シタル者 三箇年
  - 十六 普通科電機術練習生教程ヲ卒業シタル者 四箇年
  - 十七 工術練習生教程ヲ卒業シタル者 四箇年
- 但シ海軍工機學校規則第二十二條第二項ニ依リ修業期間六箇月以内ニテ工術練習生  
教程ヲ卒業シタルモノハ二箇年
- 十八 高等科看護術練習生教程ヲ卒業シタル者 三箇年
  - 十九 普通科看護術練習生教程ヲ卒業シタル者 四箇年

二十 海軍經理學校甲種練習生教程ヲ卒業シタル者 三箇年  
二十一 海軍經理學校乙種練習生教程ヲ卒業シタル者 三箇年

達第七十二號

海軍砲術學校又ハ海軍水雷學校ニ於テ臨時講習科教程ヲ卒業シタル者及現ニ在學スル特  
修科砲術練習生、特修科水雷術練習生、並海軍看護術練習所ニ於テ乙種看護術練習生教程  
ヲ卒業シタル者及現ニ在學スル普通科看護術練習生ハ達第七十一號ニ依ル服役義務ヲ有  
セス

大正二年四月一日 海軍大臣 男爵 齋藤 實



大正二年達第六  
九号ニ本号廢止

廢止

達第七十三號

海軍特修兵ノ取扱ニ關シ左ノ通定ム

大正二年四月一日

海軍大臣男 爵齋 藤 實

特修兵中普通科掌砲特技章又ハ普通科掌水雷特技章ヲ有スル者ニ限リ運用術練習生ニ選  
拔スルコトヲ得但シ新ニ特技章ヲ授與セラレタル時ハ前ニ授與セラレタル特技章ハ無効  
ニ歸スルモノトス

附 則

明治四十四年達第六十九號海軍特修兵ニ關スル件ハ之ヲ廢ス

有

達第七十四號

海軍五等卒教育規則中左ノ通改ム

大正二年四月一日

海軍大臣 男爵齋 藤 實

百五 海 軍

第九條ノ二 海兵團長ハ五等水兵修業中海軍水雷學校規則第十八條ニ適合スト認ムル者  
アルトキハ五等卒終業期二個月以前ニ於テ其ノ員數ヲ鎮守府司令長官ニ報告シ鎮守府  
司令長官ハ之ヲ海軍教育本部長ニ移牒スヘシ

達第七十五號

明治四十三年達第六十二號ヲ廢ス

有

大正二年四月一日

海軍大臣男 爵齋 藤 實

參照

明治四十三年五月達第六十二號ハ訓令術練習規則ナリ

達第七十六號

明治三十四年達第六十四號ヲ廢ス

有

大正二年四月一日

海軍大臣男 爵齋 藤 實

參照

明治四十三年達第六十四號ハ海軍學生生徒練習生及特修兵ニ授與スル證書、歷狀書式ナリ

達第七十七號

軍備補充費ヲ以テ製造スヘキ三百噸曳船二隻及六百噸曳船二隻ニ左ノ通命名ス

大正二年四月一日

海軍大臣男 爵齋 藤 實

横須賀港務部附屬

三百噸曳船

第四樽須賀丸

吳港務部附屬

三百噸曳船

第四吳丸

六百噸曳船

第五吳丸

佐世保港務部附屬

六百噸曳船

第四佐世保丸

舞鶴港務部附屬

三百噸曳船

第三舞鶴丸

百六

海軍

達第七十八號

治療品經理規程中左ノ通り改正ス

大正二年四月一日

海軍大臣 男 齋 藤 實

甲第一號表顯微鏡ノ欄中防備隊ノ上ニ「永興及竹敷」ヲ加フ

同表陸戰隊用醫療箱甲、陸戰隊用醫療箱乙ノ各欄中「水雷團」ヲ「鎮守府所在地ノ防備隊

（旅順防備隊ヲ除ク）」ニ改ム

同表小醫療箱ノ欄中「水雷團」ヲ「水雷隊、防備隊（旅順、馬公及大湊防備隊ヲ除ク）」ニ改ム

甲第三號表ノ「デシンフェクトル」ノ欄中「各水雷團ニ六〇磅」ヲ「鎮守府所在地ノ防備隊

（旅順防備隊ヲ除ク）ニ五〇磅」ニ改メ、「各防備隊」ノ下ニ「馬公及大湊防備隊ヲ除ク」ヲ

加フ

達第七十九號

海軍兵備品會計規程中左ノ通改正ス

大正二年四月一日

海軍大臣男 爵 齋 藤 實

實

第三十七條中「水路測器」ヲ「軍事教育圖書」ニ改メ又別表中左ノ通改ム

一、品名欄中「水路測器」ヲ削ル

一、兵器ノ欄出納命令官、兵備品會計官吏中 旅順工作部長 \*旅順工作部々員 ヲ削リ分

任兵備品會計官吏兵備品取扱主任中「望樓長」ヲ「望樓長(先任兵曹)」ニ改メ「無線電  
信所長(先任兵曹)」ヲ加フ

一、秘密圖書ノ欄兵備品會計官吏中「鎮守府後任副官」「測器庫主管」\*旅順工作部々員  
ヲ削リ「鎮守府文庫主管」ヲ加ヘ兵備品取扱主任中「望樓長」ヲ「望樓長(先任兵曹)」ニ  
改メ「無線電信所長(先任兵曹)」ヲ加フ

一、水路圖誌ノ欄兵備品會計官吏中「水路部測器科長」及出納命令官兵備品會計官吏中

百七 海 軍

測器庫主管 測器庫書記  
旅順工作部長 旅順工作部々員 ヲ削リ 鎮守府參謀長 鎮守府文庫主管 ヲ加ヘ兵備品取

扱主任中「望樓長」ヲ「望樓長(先任兵曹)」ニ改メ「無線電信所長(先任兵曹)」ヲ加フ

一、糧營需品ノ欄分任兵備品會計官吏兵備品取扱主任中「敷設隊」  
〔分隊長 機頭長〕ヲ削リ「防備隊」  
〔分隊長 望樓長(先任兵曹)〕「無線電信所長(先任兵曹)」ヲ加フ

一、軍事教育圖書ノ欄出納命令官兵備品會計官吏中 測器庫主管 測器庫書記  
旅順工作部長 旅順工作部々員 ヲ削リ

鎮守府參謀長 鎮守府文庫主管 ヲ加フ

一、治療品ノ欄兵備品取扱主任中「望樓長」ヲ「望樓長(先任兵曹)」ニ改ム

一、備考第四項ヲ削リ第五項中「敷設隊」ヲ「防備隊」ニ「各司令」ヲ「司令官(司令)」ニ改ム  
書式目錄中第十四號書式受拂報告書ノ下括弧内ヲ「兵器、秘密圖書、水路圖誌、軍事教育圖  
書」ニ改メ全備考第四第六中「水路測器」ヲ「軍事教育圖書」ニ改ム

達第八十號

海軍官印規程中左ノ通改正ス

大正二年四月一日

海軍大臣男 爵齋 藤 實

第二條中「防備隊」ヲ「鎮海防備隊永興防備隊竹敷防備隊」ニ改ム

第三條中「局長」、「練習所長」、及會計部長ノ下括弧内ヲ削リ「總務長官」ヲ「次官」ニ改ム

達第八十一號

艦船造修試驗検査規則中左ノ通改正ス

大正二年四月一日

海軍大臣男 爵齋 藤 實

第十六條中「水路測器」、「測器及」、「海軍測器庫及」ヲ削ル

第十七條、第十八條及第三十九條中「水路測器」ヲ削ル

百八

海 軍

1610

達第八十二號

經營需品經理規程中左ノ通改正ス

大正二年四月一日

海軍大臣男 壽齊 藤 實

第二條 經營需品ハ艦船海兵團防備隊要港部望樓無線電信所其ノ他軍隊組織ノ部隊及學校、港務部所屬ノ船艇ニ供給ス

第十三條第一項中「第十四條ノ場合ヲ除ク外ハ」ヲ削ル

第十四條 削除

第二十二條第一項ヲ別表第二號ノ經營需品ハ主管別豫算外トシ艦團其ノ他各部ニ於テ直接購買スルコトヲ得其ノ數量ハ經營需品定額表ニ依ルニ改ム

第二十三條 在外艦船ニ於テ別表第二號以外ノ經營需品ヲ要スルトキ又ハ規定ノ經營需品ヲ得ル能ハサルトキハ主管別豫算若ハ行動豫算ノ範圍内ニ於テ購買スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ分任兵備品會計官吏若ハ兵備品取扱主任ハ主管別豫算明細簿若ハ行動

百九 海 軍

豫算明細簿ニ登記シタル上直ニ書式第八號ニ依リ所管鎮守府海軍工廠需品庫ヲ經テ海軍艦政本部長ニ報告スヘシ兵備品會計官吏ハ該報告ニ依リ主管別豫算簿若ハ行動豫算簿ニ登記スヘシ

別表第一號經營需品第二種消耗品品名表中「曲板」「縱板」「火酒精」ヲ、別表第二號經營需品直買品品名表中電流ノ下小書「横須賀海兵團及東京海軍工廠豫算會用」ヲ削除ス

書式第八號中「右報告ス」トアルヲ「右主管別豫算明細簿（行動豫算明細簿）差引登記簿ノ上報告ス」ト改ム

達第八十三號

兵器經理規程中左ノ通改正ス

大正二年四月一日

海軍大臣 男爵齋藤 實

第一條 兵器トハ砲、銃、水雷、彈藥、火工品、軍樂器、飛行機、電氣諸装置、諸計器及其ノ附屬品ヲ謂ヒ之ヲ砲銃、水雷、電氣、航海ノ四部ニ分ツ其ノ名稱及細目ハ兵器簿ニ依ル

第十條第一項ヲ左ノ通改ム

兵器ハ製造及検査用見本ノ外貸出スニトテ得ス但シ海軍大臣ノ認許ヲ受ケタルモノ若ハ別表第四號ニ掲ケタルモノニシテ鎮守府司令長官ノ承認ヲ得タルモノハ此ノ限ニ在ラス

第十四條第一項中「最寄鎮守府ノ工廠長ニ申請」ノ次ニ「(舊一號式)」ヲ加フ

第二十一條第一項中「裝氣柱」ノ次ニ「飛行機」ヲ、「潜水艇用二次電池及水壓機」ノ次ニ「修整式羅針儀、經線儀、經緯儀」ヲ加フ

第二十三條中「棄却シタルトキハ」ノ次ニ「書式第二號ニ依リ」ヲ加フ

第三十一條中(舊一號式)ヲ(舊三號式)ニ改ム

第三十三條中「書式第二號」ヲ「書式第四號」ニ改ム

第三十四條中(舊三號式)ヲ(舊五號式)ニ改ム

第三十五條中(舊四號式)ヲ(舊六號式)ニ、(舊五號式)ヲ(舊七號式)ニ改ム

第三十六條中「消耗品拂出簿」ヲ「兵器消耗品拂出簿」ニ、「兵備品供用簿」ヲ「兵器備品供用簿」ニ、(舊六號式)ヲ(舊八號式)ニ、(舊七號式)ヲ(舊九號式)ニ改ム

第二十七條中(舊八號式)ヲ(舊十號式)ニ改ム

別表第一號ヲ別紙ノ通改ム

別表第二號中航海長主管ノ部ヲ左ノ通改ム

信號器、水路用計器及其ノ附屬器具等

別表第四號ヲ別紙ノ通加フ

書式第一號乃至第五號ヲ順位ニ書式第三號乃至第七號ニ、書式第八號ヲ書式第十號ニ改

メ書式第七號ヲ廢ス  
書式第六號ヲ書式第八號ニ、同書式中「消耗品拂出簿」ヲ「兵器消耗品拂出簿」ニ改メ新ニ  
書式第一號、第二號及第九號ヲ別紙ノ通加フ

百十一  
海軍

1613

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

<http://www.jacar.go.jp>

何第何號

大正 年 月 日

某海軍工廠長 氏 名殿

某艦團部隊校長 氏 名 ④

兵器定數變更(定數外兵器)請求

品名	數	稱	現定數	用現	供增(減)ス	所要數	摘	要

前記兵器ハ何々(事由)ニ依リ定數變更(定數外供給)ヲ要ス(事由ノ證明ナルモノヲ限リ之ヲ檢査簿ニ記入スルヲ得)

右請求ス (備考) 事由ハ努メテ明瞭ニ用途配備等ヲ記シ要スレハ略圖ヲ附スヘシ



何第何號

大正 年 月 日

兵備品取扱主任(分任兵備品會計官吏) 職氏 名 ④

兵備品出納命令官某海軍工廠兵器庫主管 氏 名 殿

供用兵器毀損(亡失、何々)報告

品	名		量	摘	要
	數	稱			
何	々	個			何年何月某兵器庫受

前記兵器ハ大正 年 月 日某地ニ於テ何々(事由ヲ詳記ス)ニ依リ毀損(亡失、何々)セ  
 リ(小兵器ニシテ毀損ノ事由簡明ナルモ  
 リ)ノニ限リ之ヲ摘要欄ニ記入スルヲ得)

右報告ス

右ノ毀損(亡失、何々)ハ何々ト認ム

某艦團部隊長 氏 名 ④

書式第九號

備考

本簿供用者官氏名欄内ニハ供用者記名捺印スヘシ

(用紙表紙)

(何)長 主管

兵器備品供用簿

(某 艦 團 部)

1616



別表第一號

砲銃之部

備品

砲銃及其ノ附屬器具、彈藥、火工品及附屬要具、工作器具、銃劍術要具、彈藥庫器具、艦內器具、軍樂器

第一種消耗品

演習彈藥及火工品、測壓器銅柱類、目塗劑ノ類、發火裝置隔線環、革蓋座及衝帶類、空包、白熱電燈、綠硝子

第二種消耗品

軍樂器用鋼針、卸、發條、押金、舌、硝子ホヤ、鐘量(廢物彈丸)

水雷之部

備品

水雷及其ノ附屬器具、實用爆發物及火工品類、發射機及其ノ附屬器具、水雷諸要具、空氣壓搾唧筒及其ノ附屬器具、飛行機及其ノ附屬器具

第一種消耗品

演習用爆發物及火工品類、間座及衝帶類、魚形水雷及縱舵機補用品類、魚形水雷衝突頭部、夜中照準器用白熱電燈及綠硝子、掃海浮標、油砥石、地板小復水管、陸用電信線

第二種消耗品

水中發射管衝帶筒用衝帶、小裝鎧電纜、單心裝鎧電纜

電氣之部

備品

探照燈及其ノ附屬器具、電氣通信器、無線電信機及其ノ附屬器具、試驗器具類、發電機、電動機、發動機及其ノ附屬器具、各種燈框類、白熱電燈用器具、二次電池及其ノ附屬器具、電氣加熱器

第一種消耗品

炭棒、電鍍用觸着片、開閉器用硝子蓋、革紐、間座及衝帶類、受聽器用振動板、檢波器用鑽石座、雲母輪、電氣器具保存及修理ニ要スル消耗兵器、各種補用電線、集電子類、白熱電燈類、覆硝子類、安全路解片、安全路解線

第二種消耗品

補用探照燈電纜

航海之部

備品

信號器及其ノ附屬器具、救難浮標用器具、六分儀類、羅緘儀類、經緯儀類及其ノ附屬器具、寒暖計、晴雨計、測深測程儀類、其ノ他氣象水路觀測用計器類

第一種消耗品

演習用火工品類、間座類、羅緘儀及測深儀用白熱電燈、測深儀用着色管、測程儀用油

別表第四號

工作器具、距離時計、變距率盤、彈着觀測鏡、距離測定儀(四呎六吋以下ノモノ)、驗濕器

秒時計(クロノグラフ)、喇叭

甲板時計、毎日巻掛時計、六分儀、大形三杆分度儀、小形三杆分度儀、大形三角定規、中形三角定規、兩脚規、千里鏡、大形望遠鏡、小形望遠鏡、稜鏡雙眼鏡、普通雙眼鏡、通常寒暖計、視圖鏡、人工地平儀、稜鏡羅織儀、パロサイクロノメーター、山高測アネロイド晴雨計、自記晴雨計、自記寒暖計、海中用最高最低寒暖計、海底用寒暖計、サブマリンセントリ、星球儀、測量鑄計算尺、縮圖儀、海上風力計、ハーブン測深儀、天測羅織儀

但シ本表兵器ノ貸與期限ハ壹箇月ヲ超ユルコトヲ得ス

1619

達第八十四號

汽船第一測天丸ニ左ノ通信號符字ヲ點付ス

大正二年四月八日

海軍大臣 男爵齋藤 實

G Q C H

達第八十五號

歲入歲出取扱規程中左ノ通改正ス

大正二年四月八日

海軍大臣 男爵齋藤 實

一 委任仕拂命令官竝經費取扱區分表中「豫備艦隊幕僚」ヲ「鎮守府艦隊幕僚」ニ改メ工廠ノ欄中「水路費(測天丸ヲ除ク)」及工作部ノ欄中「水路費(測天丸ヲ除ク)」教育圖書「竝測器庫」一欄ヲ削除ス

一 歲入徵收官、收入官吏並收入取扱區分表中「豫備艦隊幕僚」ヲ「鎮守府艦隊幕僚」ニ又横須賀海軍經理部長、吳海軍經理部長、舞鶴海軍經理部長ノ三欄中「所轄艦團」ヲ「所轄艦團隊」ニ改メ

百十二

海軍

1620

達第八十六號

海軍軍人軍屬休暇規則中左ノ通改正ス

大正二年四月十七日

海軍大臣 男 齋藤 實

第二條中「軍港境域内ノ練習所ニ在ル下士卒ニ關シテハ當該鎮守府司令長官」ヲ削ル

第三條 海軍兵學校海軍機關學校ノ生徒及下士卒、海軍砲術學校海軍水雷學校並海軍工

機學校ノ學生校内ニ起及下士卒ノ外出ニ關シテハ海軍教育本部長、海軍經理學校ノ學生

校内ニ起及下士卒ノ外出ニ關シテハ海軍省經理局長、海軍軍醫學校ノ學生校内ニ起

外ニ關シテハ海軍省醫務局長之ヲ定メ海軍大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第三條ノ二 前二條ノ上陸外出ノ規定ヲ設クルニ當リテ艦團其ノ他各部ノ准士官以上

學生ヲ候補生及下士卒ニ對シテハ各職別ニ從ヒ且成ルヘク各等級ニ區分シテ其ノ半數

以內ヲ上陸外出セシムル如クスルモノトス

第四條第二項ヲ左ノ如ク改ム

百十三 海 軍

前項ニ依リ缺勤届ヲ爲シタル者出勤シタルトキハ醫證ヲ添缺勤二十一日以下ノ者ハ之ヲ要セス其ノ旨届出ヘシ

第五條第二項ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

前項ニ依リ認許ヲ得タル者ニシテ引續キ缺勤八日以上ニ亘ルトキハ第四條第三項ニ準

シ報告又ハ通報スヘシ

第六條 海軍軍人軍屬喪ニ丁ルトキハ長官ニ在リテハ海軍大臣ニ、其ノ他ノ高等官ニ在

リテハ所屬長官ニ(艦船勤務ノ者ハ所轄長ニ)、准士官及判任文官ニ在リテハ所轄長ニ

届出テ出勤又ハ服務ヲ遠慮スヘシ其ノ喪中長官、所轄長ハ別表ノ期間ヲ經過シタルト

キ文書或ハ口頭ヲ以テ除服出勤又ハ執務ヲ命スルモノトス但シ必要ニ依リ其ノ期間ヲ

短縮スルコトヲ得

艦船乗組ノ准士官以上航海中喪ニ丁ルトキ、海軍生徒父母ノ喪ニ丁ルトキ及下士卒父

母妻子ノ喪ニ丁ルトキハ三日以内ノ休務ヲ許スコトヲ得

第七條第三項中「届出ヘシ」ヲ下ニ「但シ轉地療養ヨリ歸着シ出勤又ハ全治シタル場合ニ

ハ醫證ヲ添ヘ其ノ旨届出ヘシヲ加フ  
 第八條中「及海軍機關學校生徒」ヲ「海軍機關學校及海軍經理學校生徒」ニ、「前條」ヲ「第七條中」ニ改ム  
 (別表)

定 忌	出勤又ハ執務ヲ遠慮シタル者ニ除服出勤ヲ命スル日限
五 十 日	十 五 日
三 十 日	十 日
二 十 日	七 日
十 五 日	五 日
十 日	三 日
五 日	二 日

備 考  
 出勤遠慮ハ官廳勤務ノ者ニ適用シ執務遠慮ハ上陸外出規則ヲ施行スル艦團隊等ノ勤務者ニ適用ス

百十四  
 海 軍



達第八十七號

明治三十七年七月達第百十號兵器造修試驗檢査規則中左ノ通改正ス

大正二年四月十七日

海軍大臣男 齋藤 實

附表第四號表ハ要スル向ニ配布ス

第四條 艦艇ノ兵裝竣工シタルトキハ海軍工廠長ハ左記ノ圖面及成績表ヲ作成シ艦艇長

ニ交付スヘシ

圖一面

砲 塔

大砲及砲架

水壓唧筒機

大砲旋回機

百十五

海軍

揚彈藥機

水壓管裝置

水雷發射管

空氣壓搾唧筒及氣蓄器

空氣管裝置

發電機、發動機及探照燈

無線電信機

電氣兵器及電線配置

成績表

砲身砲架領收試驗及膛中檢査

第五條 供用兵器ノ増設、改造、修理、及檢査ヲ要スルトキハ艦團其ノ他各部ノ長ハ其ノ品名數量及詳細ノ事由ヲ具シ左ノ規定ニ依リ處理スヘシ

一、艦隊諸艦艇兵器ノ修理檢査ヲ要スルトキハ最寄海軍工廠長ニ請求スルト同時ニ所

屬長官ニ報告スヘシ

二、艦隊附屬以外ノ艦艇ニシテ急速兵器ノ修理検査ヲ要スル場合ハ最寄海軍工廠長ニ其ノ他ノ場合ニ在リテハ本籍鎮守府海軍工廠長ニ請求スヘシ但シ前段ノ場合ニ在リテハ同時ニ所屬長官ニ報告スヘシ

三、陸上部隊及其ノ他ノ各部兵器ノ修理検査ヲ要スルトキハ東京ニ在リテハ海軍造兵廠長ニ、其ノ他ニ在リテハ所在海軍工廠長ニ請求スヘシ

四、艦團其ノ他各部ノ長兵器ノ改造増設ヲ必要トスル場合ハ詳細ノ意見ヲ添へ所屬長官ヲ經テ海軍大臣ニ上申スヘシ

五、兵備品會計官吏貯藏兵器ノ修理検査改造ヲ要スルトキハ本文調書ヲ調製シ出納命令官ノ許可ヲ受ケ海軍工廠長若ハ海軍造兵廠長ニ申請スヘシ其ノ改造ニ係ルモノニ在リテハ海軍工廠長又ハ海軍造兵廠長ハ其ノ要否ヲ審査シ意見ヲ添へ所屬長官ヲ經テ海軍大臣ニ上申スヘシ

第六條 海軍工廠長若ハ海軍造兵廠長前條ノ修理検査請求ヲ受ケ之ヲ至當ト認メタルト

キハ豫算定額内ニ於テ其ノ緩急ヲ量リ海軍工廠ニ在リテハ鎮守府司令長官ノ許可ヲ受ケ海軍造兵廠ニ在リテハ直ニ工事ニ着手スヘシ

第七條 艦團其ノ他各部ノ長第五條ニ基キ供用兵器ノ増設改造ヲ上申シタルトキハ海軍艦政本部長ハ詳細ノカ要否ヲ審査シ必要ト認ムル事項ニ就キ海軍工廠長若ハ海軍造兵廠長ヲシテ之カ工事方案(圖面ヲ要スルモノハ之ヲ添付シ) 工事日數、重量増減及一廉毎ノ入費概算書ヲ調製セシムルモノトス

第十一條中「領收検査規格」ヲ「試験検査規格」ニ改ム

第十三條 兵器ノ試験検査ヲ分テ左ノ四種トス

第一 造修検査

第二 領收試験

第三 公 試

第四 定期及臨時検査

第一 造 修 檢 査

第十三條ノニ 海軍工廠、海軍造兵廠、海軍下瀬火藥製造所若ハ内國私立製造工場ニ於テ兵器ヲ造修シタルトキハ各其ノ定ムル所ニ依リ之カ検査ヲ施行スヘシ

第二領收 試験

第十四條 砲煩ヲ製造シ若ハ砲身ノ内筒ヲ換装シタルトキハ陸上ニ於テ左ノ方法ニ依リ試射シ第一號表ニ依リ其ノ成績ヲ又第四號表ニ依リ其ノ膛中検査成績ヲ海軍艦政本部長ニ提出スヘシ

一、砲身砲架若ハ砲身ノミヲ領收スル場合

減装藥 一發 常裝藥 四發

強裝藥 二發

二、砲架ノミヲ領收スル場合

減装藥 一發 常裝藥 一發

強裝藥 二發

前項第一號ノ場合ニ在リテハ標準初速、標準壓力ヲ、第二號ノ場合ニ在リテハ標準

百十七 海 軍

壓力(初速モ同時ニ測定スルヲ要ス)ヲ生セシメ以テ諸機部ノ耐力ヲ檢シ第一號、第二號ノ場合共砲ノ跳起角ヲ測定スルモノトス

以上發射彈數ニ對シ増減ヲ要スルトキハ海軍艦政本部長ヲシテ通知セシム  
常裝藥及強裝藥ノ標準壓力左ノ如シ

砲 種	常裝藥標準壓力	強裝藥標準壓力
十四吋砲	一八 — 一九	二二 — 二二
十二吋砲	一七 — 一八	二〇 — 二二
十吋砲	一七 — 一八	二〇 — 二二
八吋砲	一七 — 一八	二〇 — 二二
六吋砲	一七 — 一八	二〇 — 二二
四吋七砲	一四 — 一五	一七
三吋砲	一四 — 一五	一七
短三吋砲	一一 — 一三	一五

六 听 以下

一〇——一三

一五

以上標準壓力ニ對シ増減ヲ要スルトキハ海軍艦政本部長ヲシテ通知セシム

砲架領收ノ場合ニ在リテハ駐選機圓筒出入圓筒内ノ壓力ヲ測定シ其ノ曲線圖ヲ

第一號表ニ添付スヘシ

第十五條中「明治四十一年內令兵第三號保式魚形水雷」ヲ「明治四十五年內令兵第十二號

魚形水雷」ニ改ム

### 第三公 試

第十九條中「豫メ海軍大臣ノ認可ヲ受ケ」ヲ削ル

第二十條 艦船兵装ノ公試ヲ分テ左ノ四種トス

- 一、砲 煩
- 二、水雷發射管
- 三、無線電信機
- 四、電 氣

百十八

海 軍

第二十三條ノ二 無線電信機ノ公試ハ新ニ無線電信機ヲ据付ケタル場合電信室ヲ變更シ

タル場合又ハ無線電信裝置ニ大ナル變更ヲ生シタル場合ニ於テ諸種ノ波長及電力ヲ以テ送受信シ電信機械各部ノ動作要目及船體各部ノ隔離安全ヲ檢スルモノトス

第二十三條ノ三 電氣公試ハ艦艇ヲ新造シタル場合ニ之ニ裝備セル發電機、探照燈、主要電動機ノ動作ヲ檢スルモノトス

第二十六條 鎮守府司令長官ハ公試期日確定シタルトハ第二十七條、第二十九條、第二十九條ノ二及第二十九條ノ三ニ規定セル實施方法ヲ添ヘ海軍艦政本部長ニ通知スヘシ但シ其ノ通知ハ砲煩公試ニ在リテハ海軍艦政本部長ヨリ第二十七條第六號ニ對スル發射方法ヲ定メテ通知スルニ充分ノ時日アルヲ要ス

第二十七條 砲煩公試ハ左ノ方法ニ依リ施行スルモノトス

但シ必要以外ノ短艇ハ搭載セサルモ妨ナシ

- 一、空放裝藥發射 各門一發(但シ必要ト認ムルトキニ限リ發射スルモノトス)
- 二、減裝藥演習彈發射 各門一發

(イ) 鐵骨線上ニ裝セル前後兩端ノ砲塔砲 首尾線ヨリ右(左)十五度以内ノ旋廻角 度ニテ仰角〇度乃至十度

(ロ) 其ノ他ノ各砲(子砲ヲ含ム) 正横前後各四十五度以内ノ旋廻角度ニテ俯角五 度ヨリ最大仰角ニ至ル適宜ノ仰角度ニ於テ

三、常裝藥演習彈單發發射 各門一發

(△) 六個ノ聯裝砲塔ヲ龍骨線上ニ裝備セルモノ

(イ) 但シ砲塔ハ艦首ヨリ數ヘ第一、第二、第三、第四、第五、第六砲塔ト呼稱ス 第一砲塔

右(左)砲身 首尾線ヨリ左(右)旋 二十五度 左(右)旋正横ヨリ前後 四十五度以内 最大仰角 仰角五度乃至十五度

(ロ) 第二砲塔(背負式)

左(右)砲身 左(右)旋正横ヨリ後方 四十五度以内 前方首尾線ヨリ 左(右)旋十度 最大仰角 仰角〇度乃至十五度

(註)第二砲塔背負式ナラサル場合ハ第三砲塔ニ同シ

(ハ) 第三砲塔

右(左)砲身 左(右)旋前方極度旋廻ヨリ十五度乃至十五度減成ハ 左(右)旋前方極度旋廻ヨリ十五度乃至十五度減成ハ 左(右)旋正横ヨリ前後 十五度以内 最大仰角 仰角五度乃至十度

(ニ) 第四砲塔

右(左)砲身 左(右)旋正横ヨリ前後 十五度以内 最大仰角 仰角五度乃至十度

(ホ) 第五砲塔

右(左)砲身 右(左)旋前方極度旋廻ヨリ十五度乃至十五度減成ハ 左(右)旋前方極度旋廻ヨリ十五度乃至十五度減成ハ 左(右)旋正横ヨリ 前後三十度以内 最大仰角 仰角五度乃至十度

但シ第五砲塔ニシテ第六砲塔ト背負式ナルトキハ左ノ如シ

右(左)砲身 後方首尾線ヨリ 左(右)旋十五度 仰角十度乃至十五度 左(右)砲身 左(右)旋前方極度旋廻ヨリ十五度乃至十五度減成ハ 左(右)旋前方極度旋廻ヨリ十五度乃至十五度減成ハ 最大仰角

(へ) 第六砲塔

右(左)砲身 右(左)舷前方極度旋廻ヨリ五度乃至十度減成ハ  
左(右)舷前方極度旋廻ヨリ十度乃至十五度減成  
後方極度旋廻ヨリ  
右(左)舷二十度 最大仰角

(B) 五個ノ聯裝砲塔ヲ龍骨線上ニ裝備スルモノニ在リテハ(A)ニ同シ但シ(ニ)ヲ除ク

(C) 四個ノ聯裝砲塔ヲ龍骨線上ニ裝備スルモノニ在リテハ(A)ニ同シ但シ(ハ)ニヲ除ク

(D) 三個ノ聯裝砲塔ヲ龍骨線上ニ裝備スルモノニ在リテハ(A)ニ同シ但シ(ハ)ニ(ホ)ヲ除ク

(E) 二個ノ聯裝砲塔ヲ龍骨線上ニ裝備スルモノニ在リテハ(A)ニ同シ但シ(ロ)ニ(ホ)ヲ除ク

(F) 二個ノ聯裝砲塔ヲ龍骨線上ニ裝備シ左右舷側ニ六個ノ聯裝砲塔ヲ裝備スルモノ

(イ) 龍骨線上ニ裝セル砲塔砲ニ對シテハ(E)ニ同シ

(ロ) 右(左)舷前砲塔 前(後)方極度旋廻ヨリ  
左砲身 十度減成(極度旋廻)

右砲身 右(左)舷正横前方  
四十五度 最大仰角

(ハ) 右舷中部砲塔 前方極度旋廻  
右砲身 右舷正横ヨリ前後  
十度以内 最大仰角

(ニ) 左舷中部砲塔 後(前)方極度旋廻  
左砲身 左舷正横ヨリ前後  
十五度以内 最大仰角

(\*) 右(左)舷後部砲塔 右(左)舷正横後  
四十五度 最大仰角

左砲身 後方極度旋廻ヨリ  
十五度(減成) 最大仰角

(G) 龍骨線上ニ二個ノ聯裝砲塔ヲ裝シ左右舷側ニ四個ノ聯裝砲塔ヲ裝備スルモノ

- (H) ニ在リテハ(F)ニ同シ但シハニヲ除ク  
龍骨線上ニ二個ノ聯裝砲塔ヲ裝シ左右舷側ニ四個ノ單裝砲塔ヲ裝備スルモノ  
ニ在リテハ(G)ニ同シ但シ最大仰角ノ分ヲ除ク
- (I) 龍骨線上ニ一個ノ單裝砲塔及聯裝砲塔若ハ二個ノ單裝砲塔ヲ裝備スルモノニ  
在リテハ(E)ニ同シ但シ單裝砲塔ニ在リテハ最大仰角ノ分ヲ除ク
- (J) 龍骨線上前後兩側ニ裝セル砲塔砲ニ非サル各種砲  
前(後)首尾線ヨリ右(左)二十五度ノ旋廻角度ニテ仰角十度乃至十五度  
但シ甲板下ニ裝セル砲ハ舷側諸砲ニ準ス
- (K) 龍骨線上ニ裝セル砲塔砲ニ非サル各種砲  
前(後)方極度旋廻 仰角五度乃至十度
- (L) 舷側諸砲(砲塔砲及機砲ヲ除ク)  
(イ) 正前正後ニ旋廻シ得ル諸砲ハ其ノ最大旋廻角度ニ於テ仰角五度乃至十度  
(ロ) 前項ニ非サル諸砲ハ適宜ノ旋廻角度ニ於テ仰角五度乃至十度

(M) 各子砲ハ適宜ノ旋廻角度ニ於テ最大仰角  
本號ノ發射ニ於テ龍骨線上ノ諸砲ハ可成同一種砲ノ左右舷發射數ヲ同一ナラシメ  
又聯裝砲塔ニ在リテハ最大仰角ヲ左右砲身ニテ可成交互ニ發射スル如クシ舷側諸  
砲(砲塔砲及機砲ヲ除ク)ニシテ適宜ノ旋廻角度ヲ用井得ルモノニ在リテハ各砲可  
成異ナル角度ニテ發射スルモノトス

四、常裝藥演習彈一齊發射 各門一發

正横ヨリ前後十五度以內ニ於テ各砲同一ノ旋廻角度ニテ仰角七度  
本發射ハ一等巡洋艦及其ノ以上ノ艦ニ在リテハ六吋砲及其ノ以上ノ諸砲、二等巡  
洋艦及海防艦ニ在リテハ四吋七砲及其ノ以上ノ諸砲ニ對シテノミ之ヲ行フ  
但シ龍骨線上ニ裝セル砲ハ何レカノ一舷ニ於テ行フモノトス  
以上ノ場合ニ於テ艦ノ速力ハ十二節以上ナルヲ要ス  
砲艦、通報艦、驅逐艦、水雷艇ハ之ヲ行ハス

五、第四號ニ於テ發射セサル諸砲(機砲ヲ除ク)ハ正横ヨリ前後十五度以內ニテ最大仰

角ヲ以テ 各門一發

六、以上ノ外特ニ必要ト認ムルトキハ常裝藥演習彈各門一發ノ割合ヲ以テ發射セシム

此ノ場合ニ在リテハ其ノ發射ノ方法ハ海軍艦政本部長ヲシテ通知セシム

七、強裝藥、鍛鋼砂填榴彈發射(機砲ヲ除ク) 各門一發

正横ヨリ前後十五度以內ニ於テ 仰角五度

八、機砲ハ適宜ノ旋廻角度及仰角ニテ 各門二百五十發

九、艇砲ハ適宜ノ旋廻角度及仰角ニ於テ

(イ) 短三吋砲、三吋砲、二吋半砲ニ在リテハ

空放裝藥發射 各門一發(但シ必要ト認ムトキニ  
限リ發射スルモノトス)

減裝藥演習彈發射 各門一發

常裝藥演習彈發射 各門一發

(ロ) 機砲ニ在リテハ 各門二百五十發

十、減裝藥及常裝藥演習彈ハ平頭彈ヲ以テ代用スルコトヲ得

百二十二

海軍

第二十九條ノ二 無線電信機公試ハ左ノ方法ニ依リ施行スルモノトス

一、送信シ得ル波長範圍ノ測定

二、各種波長ヲ以テ送信シ得ル最大地電流ノ測定

三、最大地電流ヲ與フル波長及電力ヲ以テ四十分間連續送信

四、受信シ得ル波長範圍ノ測定

但シ受信空中線ハ協振挑勵器ヲ以テ挑勵スルモノトス

五、送受信轉換時間

第二十九條ノ三 電氣公試ハ左ノ方法ニ依リ施行スルモノトス

一、發電機ハ全負荷ヲ以テ繼續四時間運轉シ發電機、汽機、配電裝置及電路ノ狀態ヲ

試驗シ尙全負荷ヨリ無負荷ニ、及無負荷ヨリ全負荷ニ急速變化シ調速器ノ動作及電

壓ノ變化ヲ試驗ス

二、探照燈ハ炭素保器ヲ自動裝置ト爲シ三時間繼續點燈シ各部ノ狀態ヲ試驗ス又試驗

中燈ノ旋廻俯仰ヲ爲スモノトス



探照燈ハ其ノ裝備位置ヨリ防禦部格納位置マテ格納スヘキモノニ在リテハ之ヲ格納シ再ヒ之ヲ取出シ裝備位置ニ復舊スルモノトス

三、電動機(將來兵器ニ組入ルヘキモノヲ含ム)ハ其ノ用途ニ依リ適當ノ時間ヲ定メ固有ノ負荷ニテ實際運轉スルモノトス

電動機中砲煩、水雷公試及公試運轉ノ際試験スルヲ便利ト認ムルモノハ其際公試ヲ施行スルモノトス

第三十條 兵裝公試中便宜ノ時機ヲ見計ヒ水壓唧筒機、大砲旋回機、壓搾唧筒等ノ全方働作ヲ試験シ兼テ附屬器具及白熱電燈、電氣通信器類ノ完否ヲ檢スヘシ

第三十二條 公試委員ハ其成績表ヲ砲煩ニ在リテハ第二號表式、水雷ニ在リテハ第三號甲乙表式、無線電信ニ在リテハ第七號表式、電氣ニ在リテハ第九號表式甲乙丙ニ依リ各四通(本籍鎮守府司令長官ニ提出ノ協合ニハ三通)ヲ調製シ各自署名ノ上一週間以内ニ海軍工廠長ヲ經テ之ヲ鎮守府司令長官ニ提出スヘシ鎮守府司令長官ハ一通ヲ海軍大臣ニ進達シ一通ヲ艦艇本籍ノ鎮守府司令長官ニ移牒シ一通ヲ本艦艇長ニ交附スヘシ

百二十三 海軍

第四 定期及臨時検査

第三十四條 艦團其ノ他ノ各部ニ於テ砲煩ノ常裝藥發射彈數左記ノ數ヲ超過スル毎ニ其ノ長ハ其ノ發射總彈數ニ對スル裝藥種目及藥量明細表ヲ添ヘ精密艦中検査ヲ海軍工廠長ニ請求スヘシ海軍工廠長ハ之ヲ艦中検査ヲ行ヒ第四號表及艦中検査附表ニ依リ検査表ヲ調製シ備考欄内ニ意見ヲ記入シ一通ヲ海軍艦政本部長ニ提出シ一通ヲ要求元ニ交附スヘシ但シ要求元検査工廠所在鎮守府所屬ニ非サルトキハ更ニ一通ヲ所屬鎮守府工廠ニ移牒スヘシ

- 十四吋砲、十二吋砲及十吋砲 五〇
  - 八吋砲 七五
  - 六吋砲及四吋七砲 一二五
  - 三吋砲 一五〇
  - 六吋砲以下 二〇〇
- 彈數ノ計算ハ減裝藥二發ヲ以テ常裝藥一發ニ、強裝藥ハ一發ヲ以テ常裝藥二發ニ數

第三十四條ノ二 艦艇ニ於テハ前條ノ膛中検査ノ外其ノ發射彈數ノ如何ニ關セス左ノ時機ニ於テ其ノ長ハ前回検査後發射セシ裝藥種目及藥量明細表ヲ添ヘ普通膛中検査ヲ海軍工廠長ニ請求スヘシ海軍工廠長ハ要スル検査ヲ施行シ膛中検査表附表ノミヲ調製シ記事欄内ニ意見ヲ記入シ前條ニ準シ之ヲ送附スヘシ

一、年度射撃中減裝藥射撃ノミヲ施行シタル砲身ハ年度射撃三回施行後  
二、年度射撃中ノ常裝藥射撃若ハ常裝藥及減裝藥射撃ヲ施行シタル砲身ハ該年度射撃結了後

但シ三吋砲以下ノ砲ニ於テハ常裝藥減裝藥ノ如何ヲ問ハス第一號ニ依ル  
第三十四條ノ三 砲ニ損所ヲ生シ又ハ其ノ極要部ニ疵瑕ヲ生シタル爲検査ノ必要アリト認めタルトキハ前記條項ノ規定ニ關セス其ノ長ハ臨時検査ヲ海軍工廠長ニ請求スヘシ海軍工廠長ハ検査ヲ施行シ其ノ結果發射試驗ヲ必要ト認めタルトキハ第十四條規定ノ範圍内ニ於テ發射試驗ヲ施行スルコトヲ得此ノ場合海軍工廠長ハ第十四條及第三十四條

百二十四  
海軍

規定ノ成績表及検査表ヲ調製シ第三十四條ニ準シ之ヲ送附スヘシ

第三十四條ノ四 海軍工廠海軍造兵廠在庫ノ砲身及試驗砲ニ關シテハ特ニ定メタルモノ、外左ノ時機ニ於テ精密膛中検査ヲ施行スヘシ

一、在庫砲

(イ) 海軍工廠以外ノ工場ニ於テ製造セシ砲身納庫ノ際

(ロ) 艦團隊其ノ他ヨリ還納セシ際

(ハ) 實驗用トシテ特ニ在庫砲ヲ使用セシ時ハ其ノ納庫ノ際

二、試驗砲

(イ) 四吋七砲以下ノ諸砲ハ常裝藥發射彈數ニ換算數毎二十五發ヲ越ユルトキ

(ロ) 六吋砲以上ノ諸砲ハ一回ノ試驗結了後但シ一回ノ試驗ニ於ケル發射彈數五

十發ニ及フ場合ハ適宜二十五發附近ニ於テ検査ヲ施行スルヲ要ス

第三十四條ノ五 發電機、探照燈及主要電動機ヲ新設、改造若ハ大修理ヲ爲シタル場合ニハ工廠長ハ之ヲ検査ノ成績ヲ第三十二條ノ様式ニ依リ鎮守府司令長官ヲ經テ艦政本

部長ニ報告スヘシ

第三十五條 砲身ノ膛中検査ハ膛面磨耗ノ程度及侵蝕又ハ脹起ノ有無並状態等ヲ檢視計  
量スルモノニシテ膛中検査表附表調製ニ際シテハ磨耗及侵蝕標準線ヲ左記標準ニ依リ  
テ検査シ其ノ測定量ヲ圖示スルモノトス

砲種	標準磨耗量	標準侵蝕量	磨耗侵蝕ノ和量
十四吋砲	一九、五〇 <sub>g</sub>	八、九 <sub>g</sub>	二八、四 <sub>g</sub>
十二吋砲	一二、七〇	七、五	二〇、二
十吋砲	一一、五〇	六、三	一七、八
八吋砲	一〇、四〇	五、〇	一五、四
五十口径六吋砲	一〇、〇〇	四、三	七、二
四十五口径六吋砲	六、四〇	四、三	七、二
四十口径六吋砲	三、七〇	五、八	八、七

百二十五

海軍

考	備
四吋七砲	二、四四
三吋砲	二、三〇
短三吋砲	一、六〇
六吋砲	一、二〇
三所及二所半砲	一、一〇

備	考
磨耗量ハ施條部ノ起點ヨリ二十五耗砲口ニ前進シタル位置ニ於テ計量スヘシ但シ左圖ニ示ス所ヲ以テ施條部ノ起點トス	砲身
侵蝕量ハ「ガタバトカ」印跡ニ就キ施條ノ條丘面ヨリ侵蝕ノ凹底面マテヲ計量スヘシ	砲身
脹起ノ量ハ鋼管ノ接合部及段肩部ニ當ル所ニ於テ計量スヘシ	砲身



膳中検査施行ノ際ハ砲身砲架其ノ他附屬具等ノ諸活動部ノ状態ヲ嚴密ニ検査シ其ノ成績ヲ簡單ニ膳中検査表又ハ同附表記事欄(要スレハ別紙)ニ記入スヘシ

第三十五條ノ二 魚形水雷及附屬具ノ検査ハ明治四十五年内令兵第七號魚形水雷氣室、各種氣蓄器及空氣壓搾唧筒保存取扱法ニ依リ検査ヲ行ヒ其ノ成績ヲ海軍艦政本部長ニ報告スヘシ

第三十八條ノ二 陸上無線電信所ヲ管轄スル各部ノ長ハ毎年一回適當ノ時機ニ於テ其無線電信柱ノ検査ヲ海軍工廠長若ハ海軍造兵廠長ニ要求スヘシ但シ検査ヲ必要ト認メサル場合ニハ之ヲ省略スルコトヲ得海軍工廠長若ハ海軍造兵廠長ハ之ヲ検査ヲ施行シ其成績ヲ第八號表式ニ依リ三通ヲ作成シ一通ヲ工廠長ニ在リテハ所屬鎮守府司令長官ヲ經テ、造兵廠長ニ在リテハ直ニ海軍艦政本部長ニ提出シ一通ヲ検査要求元ニ交付シ一通ヲ保管シ置クヘシ

成績表改正追加

第一號表式及第四號表式ヲ別表ノ通改ム

百二十六

海軍

膳中検査表附表ヲ別表ノ通改ム

第七號表式第八號表式第九號表式ヲ別表ノ通追加ス

丙

海軍工廠検査官

砲架身  
領收、藥量決定、海上發射

試驗成績表

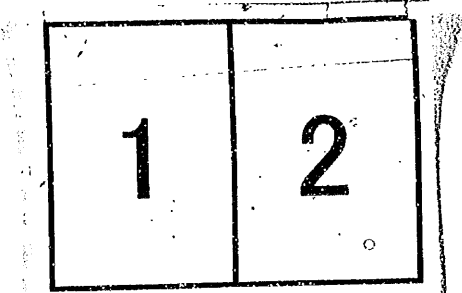
軍艦  
試驗  
砲用  
注文番號

砲(強裝)  
砲(常裝)  
但本表ノ發射彈數ヲ含マズ  
發發發

砲架身		要目		計書		實測		要目		計書		實測	
砲架	身	全長	米	施	種類			傾度					
製造所	製造年月	膛長	米	條	傾數			全長	米				
砲架種類番號	製造年月	砲量	瓦	縱橫	深	瓦		幅	瓦				
製造所	製造年月	重心點距離	米	縱橫	退却	長	瓦	耗	瓦	平均			
製造年月	製造年月	丘條間平均徑	瓦	平均	重	量	瓦	種類	瓦				
射順	射時	條底間平均徑	瓦	藥室	重	量	瓦	試驗地					
發射氣	氣溫	前端徑	瓦	前端徑	瓦			試驗年月日					
氣壓	濕度	最大徑	瓦	後端徑	瓦								
濕度	彈丸種類	容積	瓦	長	瓦								
彈丸種類	重量			容積	瓦								
裝藥種類	裝藥目												
裝藥	裝藥溫												
裝藥	加溫時間												
裝藥	重傳火藥量												
裝藥	裝填比重												
裝藥	彈底距離												
裝藥	藥室容積												
裝藥	砲口前米												
裝藥	彈丸速率												
裝藥	砲口初速												
裝藥	同平均												
裝藥	瓦斯壓力												
裝藥	同平均												
裝藥	退却長												
裝藥	出行角												
裝藥	飛行時												
裝藥	彈着距離												
裝藥	定偏												
裝藥	湖高												
裝藥	風向												
裝藥	風力												
裝藥	測角												



## 分割撮影ターゲット

<p>分割した部分の撮影順序</p>	
<p>分割撮影した理由</p>	<p>A 3 版以上のため</p>
<p>文書等名</p>	<p>軍艦(駆逐艦)無線電信公試成績表</p>
<p>上記のとおり分割撮影したことを証明する。</p>	







無線電信柱検査證

事 記	調 整 螺	静 索 根 基	静 索 碍 子	索	柱	電
<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="writing-mode: vertical-rl; transform: rotate(180deg);">検査年月日</div> <div style="writing-mode: vertical-rl; transform: rotate(180deg);">検査官</div> </div>						

手入保存法ノ適否其他必要ナル事項ヲ記入スベシ  
 各事物欄ニハ其現狀並ニ改造修理ヲ要スト認ムル事項及時機平日ニ於ケル

1639

電 氣 公 試 成 績 表

第九號表式甲

公試委員長官姓名印	發 電 機					
	原 動 機 型 式 及 番 號	560 ペリスモルコン式				
	發 電 機 型 式 及 番 號	2510 製 器				
	製 造 者	シ ー ム ン シ ャ ツ ケ ル ト				
	据 付 位 置	下 甲 板				
	所 定 電 壓	110				
	所 定 電 流	800				
	所 定 回 轉 數 (一分間=轉)	520				
	所 定 氣 壓	140				
	平 均 試 驗 電 壓	100				
	平 均 試 驗 電 流	800				
	平 均 試 驗 回 轉 數 (一分間=轉)	500				
	平 均 試 驗 氣 壓	140				
	全負荷ヲ以テ四時間繼續試驗ノ後	原磁綫ノ上昇溫度	40			
		發電子ノ上昇溫度	43			
變向器ノ上昇溫度		50				
架軸臺ノ上昇溫度		20				
据付室内溫度		20				
發電子ト地絡ノ隔縁抵抗 (ノギヤム)		35				
綫線ト地絡ノ隔縁抵抗 (ノギヤム)		6				
原磁綫間ノ隔縁抵抗 (ノギヤム)		5				
全負荷ヲ急激ニ放シタルキノ	電 壓	108				
	回轉數	600				
全負荷ヲ急激ニ加ヘタルキノ	電 壓	95				
	回轉數	450				
公 試 年 月 日	1-12-25					
記 事	震動多クシテ「ステーター」ノ必要アリ 電動送風機ニ依リ空氣ヲ送入ス 排氣ハ大氣中ニ排出ス 溫度ハ寒暖計ニテ測定セリ					

一石油發動機付發電機交流發電機ノ如キ特種ノ型式ニ對シテハ本表ニ準シ必要ノ條項ヲ記載スヘシ  
 一發電機室通風ノ狀態發電機並ニ其ノ据付臺ノ震動ノ有無等ハ記事欄ニ記載ス可シ  
 一發電機ハ復水器ニ排氣シタルヤ大氣ニ排出シタルヤヲ記入ス可シ  
 一發電機ノ原磁及發電子箱綫管ノ溫度ハ寒暖計ニテ測定セルヤ若ハ抵抗力ヨリ測定セシヤヲ明記ス可シ  
 一直流變壓機及電動交流機ノ發電機側ハ其ノ用途ヲ記事欄内ニ記入ス可シ

電 氣 公 試 成 績 表

第九號表式乙

一 探照燈据付位置格納装置等ノ適否、揚卸方法ノ概略照射ノ状態等ハ記事欄内ニ記入ス可シ

公試委員長官姓名印

公試委員官職姓名連署

探 照 燈				
型 式	七十五燭自働			
製 造 者	シーメンス シニツケルト			
番 號 及 据 付 位 置	3200 前橋橋			
管 制 器 位 置	前橋橋右側			
所 定 電 壓	100			
所 定 電 流	80			
試 験 電 壓	98			
試 験 電 流	82			
隔 縁 抵 抗 (メグオーム)	35			
特 設 抵 抗 並 其 位 置	0.365 中甲板右舷前部			
同 上 使 用 抵 抗	0.219			
全 電 路 ノ 抵 抗 (特設抵抗及炭棒ノ抵抗ヲ除ク)	0.453			
三時間繼續點燈後ノ反射鏡面ノ上昇温度	120°			
大 氣 温 度	20°			
使 用 炭 棒 ノ 種 類 及 直 徑	シーメンス <sup>+25</sup> <sub>-173</sub>			
炭 棒 ノ 消 耗 (一時間ニ於テ)	+50 <sup>1.9</sup> -60 <sup>1.9</sup>			
反 射 鏡 焦 點 距 離	310 <sup>1.9</sup>			
孤 光 調 整 ノ 状 態	良			
自 働 旋 廻 速 度	最 大	一回ニ付 12 秒		
	最 小	一回ニ付 6 分		
自 働 俯 仰 速 度	最 大	一度ニ付 1 秒		
	最 小	一度ニ付 3.5 秒		
公 試 年 月 日	1-12-25			
記 事	茲良好ニシテ保持装置ヲ檢査スルニ付、如キ事ナシ 三時間繼續點燈スルニ際、炭棒ノ熱ニシテ、炭シユラズ且ツ炭棒ノ燃焼状 用ニ廿分ヲ要スル見込、 シツクニテ上甲板ニ移シ、大ニ檢所ニ移シ、モノニシテ約三十人ヲ使 探照燈ヲ即メニ、檢査装置(或ハ二分ノ檢個ニ附シタル小形「ア」)			

電 氣 公 試 成 績 表

第九號表式丙

公試委員長官姓名印	電 機		用途	汽罐室通風			
	電 機		型式	側 經 式			
	電 機		製 造 者	芝浦製作所			
	電 機		番 號 及 据 付 位 置	2500 罐前クレーン上			
	電 機		所 定 馬 力	10			
	電 機		所 定 電 壓	100			
	電 機		所 定 回 轉 數 (一分間)	1000			
	試 驗	電 壓	全 負 荷 ノ 場 合	90			
			最 小 負 荷 ノ 場 合	88			
		電 流	起 働 ノ 場 合	150			
			全 負 荷 ノ 場 合	100			
		回 轉 數	全 負 荷 ノ 場 合	970			
			最 小 負 荷 ノ 場 合	1100			
	電 機		繼 續 試 驗 時 間	4			
	繼 續 試 驗 ノ 後	原 磁 縮 線 ノ 上 昇 温 度		40°			
發 電 子 ノ 上 昇 温 度		43°					
變 向 器 ノ 上 昇 温 度		50°					
架 軸 臺 ノ 上 昇 温 度		20°					
電 機		縮 線 ト 地 絡 ト ノ 隔 緣 抵 抗 (Ω)	6				
電 機		据 付 室 内 温 度	30				
電 機		負 荷 フ 與 ヘ タ ル 方 法	直ニ全負荷トス				
電 機		公 試 年 月 日	1-12-25				
電 機		事 記	音響甚シ				

一 電機交流機及直流變壓機ノ電機側ノモノハ其ノ用途ヲモ記事欄内ニ記入ス可シ  
 一 負荷ハ實際使用ス可キ状態ニ於テ爲ス可シ  
 一 試験時間ハ繼續使用ス可キ性質ノモノニ在リテハ四時間トシ間歇使用ス可キモノニ在リテハ其ノ性質ニ依リ適宜決定スヘシ  
 一 電機機ノ温度ハ寒暖計ニテ測定セルモノヲ記入ス可シ  
 一 電機機ハ用途ニ隨ヒ彈藥上下ノ速力大砲旋廻ノ速度等ヲ記事欄内ニ記入スヘシ

公試委員長官職姓名連署

達第八十八號

海軍無線電報取扱規約附表第一中左ノ通改ム

大正二年四月二十五日

海軍大臣 男 爵 齋 藤 實

一、海軍艦(船)名略符號二等海防艦ノ部中

J	U	E	鈴	谷
J	U	W	葛	城

驅逐艦ノ部中

J	X	L	漣	
J	X	P	鏡	
J	X	W	阜	月
J	Q	C	敷	波
J	Q	G	文	月

百二十七

海軍

J Q J 卷 雲

ヲ削ル

二、遞信省船舶局名略符號日本郵船ノ部中

J I B 因 幡 丸

ヲ削リ大阪商船ノ部中嘉義丸ノ次ニ

J T C 臺 中 丸

大阪商船ノ部ノ次ニ

農商務省

J H Y 速 鳥 丸

ヲ加フ

正 誤

大正二年達第五十七號海軍水雷學校規則第十九條第一中「身體強健」ノ下ニ「視力」ヲ同第

三十一條ノ下ニ「中」ヲ何レモ加フ同第二十八條ノ初項「ハ」本則「ノ」誤、同達第六十  
一號高等科信號術練習生規則第七條中「普通科」ノ下「ハ」同第十一條中「局」ハ「部」ノ誤、  
同達第五四號、五六號、五七號、五八號、六〇號、六一號中別表欄外「海軍武官」ノ下ニ何レ  
モ「女官」ヲ加ヘ同達第五十六、五十七、五十八號別表「練習生候補者所見表」ノ欄外（別表）  
ハ（別表第二）ノ誤、同達七〇號ノ別紙（第七號書式）ノ下ニ（第八號書式）（第九號書式）ノ  
下ニ（第十號書式）ヲ追加シ同達第七十六號中「明治三十四年」ハ「明治四十三年」ノ誤

海軍省 副官

百二十八  
海軍

達第八十九號

海軍准士官下士任用進級取扱規則中左ノ通改正ス

大正二年四月二十八日

海軍大臣 男爵齋藤 實

實

第一條第二項ヲ削ル

第三條 鎮守府司令長官、艦隊司令長官又ハ要港部司令官ハ必要ニ從ヒ拔擢名簿調製官其ノ他ヲ會シテ拔擢名簿ニ就キ審議シ下士任用進級決定候補名簿及准士官任用候補名簿ヲ調製スヘシ

鎮守府司令長官ハ必要ノ諸官ヲ會シテ准士官任用候補名簿ニ就キ審議シ准士官任用決定候補名簿<sup>第四式</sup>ヲ調製スヘシ

戰時若ハ事變ニ際シテハ本條ノ會同ヲ省略スルコトヲ得

第四條 下士任用進級決定候補名簿<sup>第三式</sup>及准士官任用候補名簿<sup>第二式</sup>ハ第二條ノ區分ニ依リ調製スヘシ

第六條第一項ヲ左ノ如ク改ム

鎮守府司令長官ハ下士缺員<sup>在籍下士ヲ以テ補充スヘキ艦隊其ノ他各部ノ定員及之ニ對スル缺員ノ合計ト現在員トノ差</sup>ノ範圍内ニ於テ任用進級員數ヲ定メ之ヲ鎮守府、艦隊及要港部ノ候補員數ニ對照シテ各其ノ任用進級スヘキ員數ニ分チ艦隊司令長官、旅順鎮守府司令長官及要港部司令官ニ通知スヘシ

第七條ノ二准士官ニ任用スヘキ員數ハ海軍大臣之ヲ定ム

鎮守府司令長官ハ准士官ノ任用ヲ行ヒタルトキハ之ヲ海軍大臣ニ報告スヘシ

第九條第四項中「海軍大臣ニ進達スヘシ」ヲ「在籍鎮守府司令長官ニ送付スヘシ」ニ改ム

第十條 戰時若ハ事變ニ際シテハ海軍大臣ハ前條ニ拘ラス准士官任用決定候補名簿又ハ

下士任用進級決定候補名簿ヲ調製セシムルコトアルヘシ

第十二條第二項ヲ左ノ如ク改ム

艦隊司令長官、旅順鎮守府司令長官及要港部司令官ハ准士官任用候補名簿送付ノ後ニ於テ任用進級セシムヘカラサル事由ヲ生シタル者アルトキハ其氏名ヲ、位勳功氏名ニ異動ヲ生シタル者アルトキハ異動事項ヲ、下士任用進級決定候補員數通知ノ後ニ於テ



